

スタンフォード大学 ~晩春のキャンパスと図書館~

三上 勝生 (経営学部助教授)

スタンフォード大学の図書館について書き始めようとして、僕は図書館を本当は何のために利用しているのだろうかと考え始めていました。そしてそもそも僕にとって図書館とは何なのか、と。



中央図書館にあたるセシル・グリーン・ライブラリーの改装された西側(ピンク・ウィング)玄関

僕は今アメリカ合衆国の北カリフォルニアのベイエリアと呼ばれる地域にあるスタンフォード大学にきています。サンフランシスコから南下すること車で小一時間ほどのところ。僕の身分は訪問研究員(visiting researcher)です。言語情報研究センター(CSLI)という研究所に所属し、日本で仲間と共同研究していた言語と情報の関係というテーマを継続して研究しています。

こちらでは3月末から始まった春学期(Spring Quarter)と呼ばれる1年の最終学期の授業は6月の第一週で終了します。秋、冬、春、夏と完全クォーター制です。僕がこちらに来て4月後半から聴講し始めた様相論理学と自然言語処理のクラスも5月の最後の週に終わりました。6月に入り、学生たちはレポート書きや試験に追われているようで、図書館は日曜日でも学生で混んでいます。日本の大学生協にあたるブックストアの地階では近づいた卒業式に身につける帽子と上着の袋入りセットが大量に準備されています。キャンパスではその袋を持った学生をよく見かけます。夏学期にも他学期の半分くらいの数の授業が開講され、早く単位取得したい学生たちは授業を取りますが、基本的には9月末までは夏休みです。

5月までは、これでもかというペースで開かれていた学部、学科、研究所が主催する、ミーティングやセミナーやフォーラムやカンファレンスやシンポジウム、そして一般公開の講演会などもぱったりと無くなり、それらを楽しみにしていた僕はちょっと寂しくなると、その代わりにようにして夜間は中央図書館にあたるグリーン・ライブラリーのメディア資料を漁って、古いドキュメンタリー映画なんかを連日借り出して観ています。最後に観たのはジョナス・メカスの『ザ・ブリック』という1時間弱の軍隊の刑務所内の一日を再現したかなり重たい内容のフィルムでした。メカスがこんな映画を撮っていたとは迂闊にも知りませんでした。こちらでは音楽メディアだけは音楽学部のあるブラウン・ミュージック・センター内のミュージック・ライブラリーにまとめて所蔵されています。最後に借りたのは、Night Waltz: the Music of Paul Bowls : a filmでした。映画にもなった『シェルタリング・スカイ』の原作で有名な、モロッコを愛したアメリカの作家ボウルズが若い頃に作曲したピアノ曲や管楽器のソナタなど18曲が写真やインタビュー

映像を背景に流れるとても良くできた音楽DVDでした。

6月の後半からはキャンパス内の講堂や音楽堂などを会場にしてスタンフォード・ジャズ・フェスティバルがなんと8月初めまで開催され、計33日間に亘って全米から有名なミュージシャンが続々とやってきます。通しのチケットが410ドル、1回分は20ドルくらいです。どうしようか迷っています。

スタンフォード大学の図書館に関する一般的な情報*や収集されている情報リソースのシステムの全体像**はそれぞれのウェブサイトで見ることができます。例えば前者では、キャンパス内に30カ所を超える図書館があり、蔵書は七百万冊を超え、中心はグリーン・ライブラリーであることや、その一部が勉強室や展示空間を備えた超豪華設備の棟として一新されたことなどが、写真入りで紹介されています。

図書館に入るには個人情報磁気データとして書き込まれた身分証を検知器に通さなければなりません。出入り口のカウンターでは数時間交代で係の人が出入りする利用者をチェックしています。鞆の持ち込みが許されているので、出るときは鞆の中身を全部見せ、図書館の書籍は返却日をチェックされます。ただし、担当者によってはかなりいい加減な場合もあります。図書館の中はとて静かで、いつ行っても多くの学生たちが閉館まで思い思いのスタイルで一心不乱に勉強しています。勉強室、読書室と呼ばれる空間も豊富にあり、椅子やソファもあちこちに置かれているので、僕は本やメディア資料を借りるときだけでなく、疲れたときや、ボーッとしたいとき、一人になって集中してものを考えたいときや、ものを書きたいときによく利用しています。

こちらに来てから図書館で学生たちに紛れて過ごす時間の多い僕がしみじみと感じていることは次のようなことでした。彼らの多くはおそらくはここ、大学の図書館で過ごしている時間を、自分の人生のごく短い一時期にすぎない時間とみなしている。かつての僕もそうだった。しかしこうやって今、幸運にも20年以上を経て再び半ば学生時代に戻ったような生活をしている者には、彼らが今生きているこの自由で孤独な時間は、もしかしたら人生で最も深く静かにときめいている時間なのかもしれないと思えるのでした。冒頭の二つの問いの答えはその辺りに隠れているような気がします。



6月最初の日曜日の図書館北側玄関前。学生が乗り付けた自転車が駐輪場から溢れている様子。



学生が頻りに出入りする図書館北側玄関

注 *<http://www.stanford.edu/home/welcome/campus/libraries.html>
**<http://library.stanford.edu/>